

本 忘れない本 思い出す本

こんな時、彼ならどうする？

■墨攻ぼくこう

酒見賢一〈著〉



「みんなが主役で船を出す」というピースボートの活動は、中学の時に読んだ小田実さんの『何でも見てやろう』の精神を具体的な形にしたものです。数人の仲間と1983年に始め、だんだんと大所帯になり、念願だった地球一周も実現させた。10年目くらいかなあ、私がスランプになつてん。

組織が大きくなると気の合はん人、分かんらん人、色んな人と付き合い引張っていかねあかんですよ、正直、疲れてたわけよ。そんなとき、親しくしていた人から「読んでみ」と勧められたのがこの本。大昔の中国の話やし、読めない人名も多いけど、ぐんぐん引き込まれた。読み切った時には元氣出とつてん。以後『墨攻』は私のバイブル、主人公・革離はリーダーの理想像であり続けている。

彼は墨子教団の一員として、強敵に狙われている小さな城に単身乗り込む。そもそも余所もんや。何でも自分からやってみせて、教える。そして無私無欲。汚い下男部屋で眠る。根っからの戦闘職人やから無欲も質素も実利的な意味がある行為なんやろけど。でも、血尿が出るまで働き続けるから、そこにはウソがない。一方で非常に冷徹です。勝つために必要なことには、一切妥協しない。

衆議院議員 辻元 清美さん



60年生まれ。早大生の時に「ピースボート」設立。96年衆院選で初当選。近著に『いま、「政治の質」を変える』—小暮誠撮影

この城はムラ。中に雑多な民衆が住んでる。ピースボートもおんなじで、不登校の中学生もいれば余生を楽しむおじいさんもいた。この本はそんなバラバラの集団で、リーダー次第で力が発揮できるようになると教えてくれた。

最近、私の胸にしみるようになったんは、革離の説く、弱い人を守って守りぬいて勝つという考えやな。「総理、総理」のころの自分

は攻める気持ちが強かったし、攻めれば何でもうまくいく感じやあった。でも、秘書の給与問題で逮捕されて、あれは清美バブルやったと分かった。私を泥の穴から引き出したんも、泥をふいてくれたんも有権者やん。議員としての私はみんなのものや。与党の一員に

なつてさらに、弱い人を守ることがの大事さ、そのための冷徹な決断の必要性を感じるようになった。実際の行動でも、こんな時、革離やったらどうするやろと考えてしまう。東日本大震災後にボランティア担当の首相補佐官になった時も、まずやろと決めたのは避難所で寝起きすること。被災者と一緒に活動することやっした。

革離のあつけない最期は悲しかったなあ。でも、政治家にも、野垂れ死にでいいという覚悟が要ると思ってる。私の場合、時々、側に誰かがいてほしくなるから、未だ革離たりえず、なんやけど。
(新潮文庫・品切れ。マンガ版は小学館文庫全8巻・各610円)

構成・鈴木繁